

比喩のフレーミング機能の実証的な対照研究： 日本と英国における Amazon レビューのレトリック

小松原 哲太（神戸大学）[†]

An Empirical Contrastive Study of Metaphorical Framing in Amazon Reviews: Rhetorical Strategies in Japan and the UK

Tetsuta KOMATSUBARA (Kobe University)

要旨・既発表の有無

ある対象の特定の側面を強調することで、その定義や因果関係の理解、評価を誘導する比喩のフレーミング機能は、近年世界的に注目を集めている。しかし、実証的なデータを用いた量的な対照研究によって、比喩によるフレーミングの普遍的特徴を解明する研究はなされていない。本研究では、ガルシア＝マルケス『百年の孤独』の日英翻訳版に対する日本と英国の Amazon レビューから抽出したテキストを対象として、比喩を網羅的に同定、意味的特徴をアノテーションし、その作品評価のフレーミングのパターンを分析した。その結果、読書経験を＜旅＞に喩えて否定的評価を表出する方略が日英語で広く観察された。言語特有のフレーミングとしては、日本語では＜魔法＞の比喩が多く、英語では＜織物＞の比喩が多くみられた。本研究の知見は、文学作品を鑑賞し、その価値を評価するという主観性の高い経験を評価するレビューの言語特徴の一端を明らかにするもので、ウェブ上の購買行動に影響を与える商品評価のレトリックの特性の通言語的な解明につながるものと言える。

なお、本発表は The 17th Researching and Applying Metaphor Conference の発表 ‘Metaphorical framings in customer reviews: Rhetorical strategies of Amazon reviews in Japan and the UK’ を拡張したものである。

1. はじめに

比喩（隠喩とそれに関連する修辞技法）は、ある対象をフレーミングする機能をもった実用的な言語技術であり、比喩のフレーミング機能は現在世界的に関心を集めている (Burgers, Konijn, and Steen 2016, Boeynaems et al. 2017, Semino, Demjén, and Demmen 2018, Komatsubara 2023, 2024)。「フレーミング」とは、ある対象の特定の側面を選択的に強調することによって、それに対する定義や因果関係の理解、評価、さらには態度を特定の方向へと導く働きを指す。例えば Hendricks et al. (2018) は、比喩を用いた「修辞的フレーミング」の働きが医療場面で感情に影響することを論じ、がん治療を＜戦い＞に喩える場合は、＜旅＞に喩える場合に比べ、病気から回復しなかった患者が抱く罪悪感に共感しやすい傾向があることを示した。この修辞的フレーミングは、社会

[†] komatsubara.tetsuta@gmail.com

的・文化的な文脈で多角的に研究が進められている (Burgers, Konijn, and Steen 2016)。

修辭的フレーミングが我々の評価や行動に影響するジャンルとして、Amazon の商品レビューなどの、ウェブ上の「クチコミ」がある。インターネット上で商品を買ったり、コンテンツを閲覧したりするときに、レビューの評価を参考にすることは近年多くなっている (Mudambi and Schuff 2010)。オンラインの評価情報の伝播はグローバルな社会現象である。人の消費行動を促進／抑制するような評価方略が言語文化に依存したものかどうかは、言語間を比較しなければ判断できないが、言語文化を問わず使われる普遍的な方略は、グローバル市場で大きな影響力をもつと想定できる。そこで本研究ではフレーミングの観点から、クチコミに使われる比喩の言語間比較を行い、ウェブ上の商品評価に用いられる比喩の普遍的な方略について新たな知見を得ることを目指す。

比喩のフレーミング機能は、コミュニケーションにおける態度、評価、意志決定、行動などの変容に関わる言語の高次機能であり、言語の基本的な構造や機能の研究と比較すると、実証的な言語学的研究の蓄積は進んでいない。また、フレーミング機能の成立には言語文化の詳細な背景知識が関与しているが、言語間を比較によって、通言語的なフレーミングの特性を抽出する試みはなされていない。本研究は、実証的なデータを用いた量的な対照研究によって、ウェブ上のクチコミの修辭的フレーミングの普遍的特徴を解明することを目的とする。本発表では、この研究プロジェクトの事例分析の1つとして、文学作品の日英翻訳書に対する日本と英国の Amazon レビューの日英対照分析を行い、ウェブ上の言説のフレーミング方略について新たな知見を得ることを目指す。

2. 方法

2.1. データ

日本語のデータは、Amazon.co.jp におけるガブリエル・ガルシア＝マルケス『百年の孤独』（新潮社、2024 年）に対する 2024 年 11 月 5 日時点のコメント付きレビュー163 件のうち、「トップレビュー」として表示される 100 件のレビューである。英語のデータは、Amazon.co.uk における Gabriel Garcia Marquez, *One Hundred Years of Solitude* (Penguin, 2014) に対する 2024 年 11 月 5 日時点のコメント付きレビュー1,620 件のうち、「Top reviews」として表示される 100 件のレビューである。投稿された国を確認し、100 件のレビューが、日本語のデータは日本からの投稿、英語のデータは英国からの投稿のみであることを確認した。各レビューについて、レビューの本文、タイトル、投稿日、星評価（1～5）、「参考になった」(Helpful) の数、投稿日を記録した。なお、コメントなしのレビューも含めると、日本語のレビュー総数は 390 件、星評価の平均は 4.1、肯定的なレビュー（星評価が 4 または 5）は 292 件で全体の 74.9%を占めた。英語のレビュー総数は 13,082 件、星評価の平均は 4.4、肯定的なレビューは 10,882 件で全体の 83.2%を占めた。

『百年の孤独』は 1967 年にスペイン語で出版された小説である。著者ガルシア＝マルケスはコロンビアの小説家で、マジックリアリズムの旗手として知られ、1982 年にノーベル文学賞を受賞した。同作品は日本、英国の両国で多くの場合異文化と感じられる南米文化を背景としている。ガルシア＝マルケスの代表作であり、両国の Amazon で多くのレビューがある。

分析対象とするレビューの商品カテゴリーを選定する上で、小説は、商品の質が主観的にしか評価できず事前に情報が得にくい「エクスペリエンス商品」 (Mudambi and Schuff 2010:

191) であり、閲覧者が比喩の影響を受けやすいと考えた。また、異文化を背景とした物語を説明したり、評価したりするためには、より身近な経験や事物を通じた表現が必要になると考えられ、その際にも比喩によるフレーミングが何らかの役割を果たすのではないかと想定した。

2.2. 比喩の分析

隠喩同定法 (metaphor identification procedure; MIP) (Pragglejaz Group 2007) の基本方針に従って、レビューの本文およびタイトルから比喩表現を網羅的に抽出した。具体的には、まずテキストを語レベルの単位に区切り、文脈上の意味が、基本的な意味（具体性、身体性、明瞭性が高い意味）と異なるものに注目する。そのなかで、文脈上の意味と基本的な意味が類似性にもとづいて対応づけられるものを比喩とする。例えば (1) の下線部「味わい」「入り口」「立つ」を比喩として抽出した。MIP では隠喩、直喩、諷喩は区別されないため、これらをすべて比喩として同定対象とした。(1) の「入り口に立ったくらいの気分」は、「くらいの」という比較表現が比喩性を明示するので直喩の例であるとも言える。助詞などの文法形式は分析対象に含めなかった。

- (1) まだ本書を味わい尽くしたとは思えず、その入り口に立つたくらいの気分ではあるけれど、まずは傑作、と言っておきたい。
(☆5「面白かった」参考になった：42, 2024 年 8 月 4 日)

本研究では、比喩の文脈上の意味は目標領域 (target domain) に属し、基本的な意味は起点領域 (source domain) に属すると考える。例えば「味わい」の文脈上の意味は、文学作品の鑑賞という目標領域に属し、基本的な意味は、食事という起点領域に属する。比喩表現の計数は、基本的に語単位で行った。ただし、同一の起点領域をもつ比喩が連続して出現し、句レベルの比喩となる場合には 1 例とみなした。例えば (1) では「味わい」は<食事>の比喩として 1 例とみなし、「入り口」「立つ」は<旅>の比喩として 1 例とみなした。

評価のフレーミングを与える概念領域という観点から、比喩の起点領域のボトムアップな分類を試み、考察対象となるすべての比喩表現が分類できる起点領域のカテゴリーとして、力動性、旅、文学（『百年の孤独』以外の文学作品やその著者）、視覚、織物、魔法、水、容器、聴覚、音楽（楽曲名やアーティスト名）、人、文化（特定の文化圏に固有の事物）、絵画（作品タイトルやアーティスト名）、植物、戦い、建築、経済、食物、パーティ、嗅覚、タスク、映画（作品タイトルや監督名）、火、ドキュメンタリー（番組名）、昆虫、物理、風という 27 個を仮定した（なお、この順に頻度が高かった）。

同様の観点から、目標領域についてもボトムアップな分類を試み、内容（作品内容の特徴を比喩的に表すもの）、体験（読書体験を他の経験になぞらえるもの）、価値（作品の美しさや面白さなどを喩えるもの）、メタ情報（作者や作品を別の作者や作品に見立てて表すもの）の 4 つを仮定した。この 4 つを組み合わせると、<メタ情報>をもった作品の<内容>を<体験>しく<価値>を評価する、という鑑賞のフレームが構成される。

3. 結果

日本語のレビュー100 件から抽出された比喩は 99 件で、比喩表現が 1 つ以上含まれているレビュー（40 件）あたりの比喩件数は 2.5 件であった。英語のレビュー100 件から抽出さ

れた比喩は 133 件で、比喩表現が 1 つ以上含まれているレビュー（49 件）あたりの比喩件数は 2.7 件であった。最も多くの比喩が使用されていたレビューにおける比喩件数は、日本語で 12 件、英語で 15 件で、数名のレビューワーが突出して多くの比喩を使用していた。比喩表現を使用していたレビューの割合、比喩表現の頻度、1 レビューあたりの比喩の頻度の最高値について、日本語と英語のデータには類似した傾向がみられたと言える。

表 1 は比喩の起点領域の分類結果の日英比較である。＜力動性＞と＜旅＞の比喩がこの順に最も割合が高いことが日英に共通していた。＜文学＞、＜視覚＞、＜織物＞の比喩は英語に多く、＜魔法＞の比喩は日本語に多かった。

起点領域	日本語	英語	合計
力動性	22 (22.2%)	28 (21.1%)	50 (21.6%)
旅	22 (22.2%)	17 (12.8%)	39 (16.8%)
文学	5 (5.1%)	13 (9.8%)	18 (7.8%)
視覚	4 (4.0%)	14 (10.5%)	18 (7.8%)
織物	1 (1.0%)	14 (10.5%)	15 (6.5%)
魔法	11 (11.1%)	3 (2.3%)	14 (6.0%)
水	5 (5.1%)	7 (5.3%)	12 (5.2%)
容器	2 (2.0%)	4 (3.0%)	6 (2.6%)
聴覚	2 (2.0%)	4 (3.0%)	6 (2.6%)
音楽	5 (5.1%)	1 (0.8%)	6 (2.6%)
その他	20 (20.2%)	28 (21.1%)	48 (20.7%)
合計	99 (100%)	133 (100%)	232 (100%)

表 1 日英語の Amazon レビューで使用された比喩の起点領域の頻度

日英共通で高頻度であった、＜力動性＞と＜旅＞の比喩の例を以下に示す。(2)(3) は＜力動性＞の比喩の例である。(2) は作品の魅力に惹かれる経験が物理的な引力の経験としてフレーミングされている。(3) は作品の内容が擬物化され、作者の制作過程は物体の力動的変化の過程として捉えられている。＜力動性＞の比喩は多様性に富んだカテゴリーで、少なくとも引力（「グイグイ惹きつけられる」‘*magnetism of the book*’）、捕捉（「抜け出せずに読んでしまい」‘*grabbed by the first section*’）、破壊（「想像力の限界をぶちやぶり」）、操作（‘*tidy the story up*’）、解放（「物語のくびきを逃れて」）、形成（‘*the characters were beautifully crafted*’）などの力動性に関わるものがみられた。

- (2) （読了できるか否かの）不安は何処（いずこ）へ…即座に引き込まれる
 (☆5「ラテン文学の傑作の文庫化」参考になった:24, 2024 年 8 月 15 日)
- (3) a collage of ideas *slung together* so randomly it seems clear, like the characters in this book, they were never meant to *come together in one place*
 (☆2 ‘miasmic/psycho-tropic/shambolic’, Helpful: 4, 4th May 2016)

(4)(5) は<旅>の比喩の例である。いずれも話の展開を移動としてフレーミングするものである。特に日本語では「円を描くように」「螺旋のように」という円形軌道の比喩が複数みられた。英語では、物語の世界が理解しにくいことを ‘difficult to get into at first’ のように、入り込みにくさとして表現する例が複数みられた。旅の比喩については 4.1 節でも検討する。

- (4) いやー、まともに読めたものではない。これはななめ読みにするしかない。私も実際そうした。起承転結が意図的に崩され、話がどんどん違う方向に進む。(☆5「マコンドは、マチュピチュかマヤ文明都市か」参考になった：29, 2024 年 7 月 6 日)
- (5) The ending of the book (which I shan’t spoil) does go a long way to explaining why this is. (☆3 ‘Beautifully written, but quite frustrating’, Helpful: 3, 5th December 2011)

起点領域によって、目標領域のどの要素をフレーミングするかには偏りがみられた。表 2、表 3 は日英語それぞれにおける起点領域と目標領域の対応の傾向を示す。体験、内容、メタ情報、価値の順に頻度が高い点は日英語に共通していた。他の共通点としては、第 1 に、体験が最も比喩のターゲットになりやすく、その多くが<力動性>、<旅>を起点とした比喩である傾向、第 2 に、<文学>でメタ情報をフレーミングする傾向がみられた。

	内容	体験	価値	メタ情報	合計
力動性	4	16	2	-	22
旅	4	17	1	-	22
文学	-	-	-	5	5
視覚	-	3	1	-	4
織物	1	-	-	-	1
魔法	3	5	3	-	11
水	3	1	1	-	5
容器	2	-	-	-	2
聴覚	-	1	1	-	2
音楽	-	-	-	5	5
その他	6	8	3	3	20
合計	23	51	12	13	99

表 2 日本語における起点領域ごとの目標領域の要素の頻度

	内容	体験	価値	メタ情報	合計
力動性	12	13	3	-	28
旅	-	17	-	-	17
文学	1	1	-	11	13
視覚	6	6	2	-	14
織物	14	-	-	-	14
魔法	-	2	1	-	3
水	1	4	2	-	7
容器	2	-	2	-	4
聴覚	-	4	-	-	4
音楽	-	-	-	1	1
その他	10	10	2	6	28
合計	46	57	12	18	133

表 3 英語における起点領域ごとの目標領域の要素の頻度

4. 考察

本調査の結果は、同じ文学作品に対する日英語のレビューに、同程度の頻度で、類似した起点領域の比喩が用いられている傾向があることを示している。特に、起点領域のなかで頻度上位を占める＜力動性＞と＜旅＞、目標領域のなかでフレーミング対象となる頻度順位が体験、内容、メタ情報、価値の順になることが共通であることは、文学作品に対するレビューにおける普遍的なフレーミング方略の存在を示唆している。一方で、日本語のみ、英語のみに観察された傾向もみられた。また、概念的な分類としては同じでも、実際のフレーミング効果に文化的な知識が強く関与している例もみられた。以下では、普遍性と文化固有性という観点から、フレーミング方略のより詳細な特性を検討する。

4.1. 普遍的フレーミング

日英語を通じて最も頻度が高い起点領域は＜力動性＞であったが、3 節で述べたように、引力、捕捉、破壊、操作など、異なるフレーミングの効果につながると思われる概念的な多様性がみられた。したがって、本調査においては、日英語の両方で高頻度であり、フレーミング効果という点で等質性が最も高い起点領域は＜旅＞である。「物語の入り口」「読み進む」「結末にたどり着く」など、＜読書は旅＞という概念メタファーは定着した捉え方である。本調査でみられた旅の比喩には慣習的なものも多かったが、これらの慣習的比喩を拡張した比喩も多くみられた。

興味深いのは、旅の比喩が負の評価を表出するために使用される傾向である。旅の比喩が、肯定的・否定的評価のいずれを喚起するか、または評価を喚起しないかをみると、日本語の旅の比喩 22 件のうち、肯定的評価を喚起する例が 13.6%、評価を喚起しない例が 36.3%、否定的評価を喚起する例が 50.0%であった。英語では、17 件のうち、肯定的評価を喚起する

例が 35.3%、評価を喚起しない例が 17.6%、否定的評価を喚起する例が 47.1%であった。

否定的評価を喚起する例としては、物語に入り込みにくい、一方向に進行しない、読書が進まない、といった読書体験の困難を移動の困難として捉える (4)(6) のような事例や、物語の進行が起伏に富んだものではなく、くり返しのように感じられる箇所があることを、旅の単調さやあてどなさとして捉える (7)(8) のような事例がある。

- (6) 働きながらだと本当に本格小説は読み進めない。年もあるんだけど
(☆5「なかなか、前に進まない」参考になった：14, 2024 年 7 月 16 日)
- (7) It meandered through lots of anecdotes and time-progression, but without any real sense of plot. (☆2 'More effort than enjoyment in reading this book', Helpful: 14, 5th August 2020)
- (8) Following on from this there is no great tragedy, setback, and victory, and in this, there is no *rise and fall*.
(☆5 'Magical realism is an acquired taste', Helpful: 9, 28th December, 2019)

レビューで使われる比喻が否定的評価と結びつきやすい傾向は、先行研究でも論じられている。Fuoli, Littlemore, and Turner (2021) は映画のレビューの評価表現を調査し、比喻を使った評価表現は、比喻でない評価表現よりも評価極性が否定に傾きやすいことを明らかにした。本調査の結果は、特定の起点領域を用いた比喻のフレーミングが、否定的評価を表出する上で使用されていることを示したという点で、先行研究で指摘されてきた比喻と否定的評価を関係づける、具体的なフレーミング方略の一端を明らかにしたと言える。

4.2. 日本語特有のフレーミング

表 1 が示すように、魔法を起点領域としたフレーミングは、相対的に日本語に多くみられた。(9) の「魔法をかけられたかのように」は作者の特殊な文体を鑑賞する経験の非現実性を強調し、タイトルの「魔法の良書」というまとめ方はその文学的価値を神秘的なものとして捉えていると言える。

- (9) 著者の文体の魅力として、ガルシア＝マルケスの文体は、まるで魔法をかけられたかのように美しく、以下の 3 つの理由で読む人を惹きつけられていると感じました。(☆5「世界を新しい目で見える力を与えてくれる魔法の本」参考になった：17, 2024 年 8 月 17 日)

この魔法によるフレーミングは、この文学作品の特殊性を強調し、鑑賞や評価をする上で通常の因果関係や論理の基準が通用しないことを含意するものであるが、いわゆるマジックリアリズムと言われる表現技巧のパラダイムを背景としたものだと考えられる。ガルシア＝マルケスはマジックリアリズムの旗手として知られているが、この文学史上の位置づけは、訳者である鼓直の「訳者あとがき」と筒井康隆による「解説」で強調されている。日本語版のレビューにおける魔法の比喻の頻出は、このあとがきと解説の内容と無関係ではないように思われる。作家や批評家による文学批評は一般読者にとっては権威的な存在であり、レビューにおける比喻の選択に一定の影響を及ぼしていることが示唆される。

4.3. 英語特有のフレーミング

表3を表2と比較すると、作品の内容を織物に喩える比喩は英語においてのみ高頻度で見られることが分かる。(10)はテキストのプロットを喩える‘weave’(織り方)の比喩から始まり、＜テキストは織物＞という概念メタファーを展開した比喩が連続して用いられている。ウィルトン・カーペット (Wilton carpet) など、イギリス文化を背景とした具体的な織物のイメージも使われており、これらの比喩によって鮮明なイメージャリーが導入されている。

- (10) Unsurprisingly the plot is baffling. Its *weave* is not unlike that of a *Wilton carpet*, so instead of ‘*U*’ shaped yarns, the *fibre* is woven all the way through the carpet and then *sheared* to create a range of *cut and loop textures*.
(☆5 ‘One of the richest, most dense, detailed, dreamlike, symbolic, mysterious, magical, funny...’, Helpful: 29, 1st September 2023)

＜テキストは織物＞という概念メタファーは、「物語を紡ぐ」など日本語の慣習的表現のなかにもある程度はみられるが、英語では *weave* (織る)、*interweave* (織り合わせる)、*knit* (編む)、*thread* (糸を通す) といった表現はテキストの比喩的描写によく用いられるが、その理由の1つは *text* (テキスト) と *textile* (織物) の語形の類似性 (ないしは語源的な関連性) であると考えられる。このような語形・語源の関連性は日本語にはなく、このことが＜テキストは織物＞という比喩の日英の頻度差に反映されたものと推測できる。

4.4. 文化依存的フレーミング

表2と表3は、文学や音楽を比喩の起点領域として持ち出すことで評価対象の文学作品をメタ的にフレーミングする例が、両言語にみられることを示している。これは方略としては同じであるが、このタイプのフレーミングには、文化固有の知識が大きな役割を果たす。(11)は日本の漫画家つげ義春のシュールな作風がガルシア＝マルケスの文体を評価する上で引き合いに出されている。(12)では、テキストをランダムに切り合わせて新しいテキストを作るカットアップの手法で知られるアメリカの小説家ウィリアム・バロウズ (William Burroughs) と、バロウズの手法を歌詞に応用したイギリスのアーティストデヴィッド・ボウイ (David Bowie) が言及されているが、これらの人物についての文化的知識がなければフレーミングは成立しない。

- (11) ちなみに変な話、つげ義春の「ねじ式」を想起したのはやっぱり自分だけだろうなあ・・・
(☆4「ブンガクの境界とは」参考になった：24, 2024年9月9日)
- (12) The reader might be forgiven in thinking that s/he had one foot in a *William Burroughs cut-and-paste text* and the other in a *David Bowie lyric*.
(☆5 ‘One of the richest, most dense, detailed, dreamlike, symbolic, mysterious, magical, funny...’, Helpful: 29, 1st September 2023)

5. おわりに

異文化を背景とした翻訳小説を読むという、言い表すのが容易ではない経験を表現する上で、比喩はその経験をフレーミングし、特定の側面を際立たせる機能を担っている。＜力動

性>や<旅>といった物理的な行為や移動にもとづく身体性の高い比喩は、日本語、英語を問わず広く使用されていた。特に否定的評価を喚起する<旅>のフレーミングが共通して高頻度であったことは、普遍的なフレーミング方略の存在を示唆する。日本語で好まれる<魔法>の比喩、英語で好まれる<織物>の比喩には、言語的、文化的な動機づけがみられる。言語間の比較を行い、言語文化の背景を分析することで、普遍的なフレーミング方略の特徴が浮かび上がってくると考えられる。

人はウェブ上の評価情報につねにさらされている。ショッピングでの商品購入、レストランやホテルの予約、小説・映画・音楽などのエンターテインメントの選択にさえ、オンラインの「クチコミ」の評価はつきまとい、消費者の態度や意志決定を左右している。この評価情報は言語を介しているが、その言語特性の一端を本調査によって明らかにした。本調査では比喩の目標領域を、あるメタ情報をもった作品の内容を体験し価値を評価するという鑑賞の概念構造として整理したが、この概念構造を目標領域とする比喩が使われると思われる商品カテゴリーは、文学作品以外にも、映画、音楽などが考えられる。これらのカテゴリーの横断的調査を行うことで、主観性の高いレビューにおける比喩的フレーミング方略の一般的特性が解明されることが期待される。

謝 辞

本研究は国立国語研究所基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「アノテーションデータを用いた実証的計算心理言語学」によるものである。本研究は JSPS 科研費 JP24K03841 の助成を受けている。

文 献

- Boeynaems, A., Burgers, C., Konijn E. A., & Steen, G. J. (2017). The effects of metaphorical framing on political persuasion: A systematic literature review. *Metaphor and Symbol*, 32 (2), 118–134.
- Burgers, C., Konijn, E. A., & Steen, G. J. (2016). Figurative framing: Shaping public discourse through metaphor, hyperbole, and irony. *Communication Theory*, 26 (4), 410–430.
- Fuoli, M., Littlemore, J., & Turner, S. (2021). Sunken ships and screaming banshees: Metaphor and evaluation in film reviews. *English Language & Linguistics*, 26 (1), 75–103.
- Hendricks, R. K., Demjén, Z., Semino, E., & Boroditsky, L. (2018). Emotional implications of metaphor: Consequences of metaphor framing for mindset about cancer. *Metaphor and Symbol*, 33 (4), 267–279.
- Komatsubara, T. (2023). Framing risk metaphorically: Changes in metaphors of COVID-19 over time in Japanese. In A. Ädel & J. Östman (Eds.), *Risk discourse and responsibility* (pp. 63–85). John Benjamins.
- . (2024). Framing and metaphor in media discourse: Multi-layered metaphorical framings of the COVID-19 pandemic in newspaper articles. In C. Shei & J. Schnell (Eds.), *The Routledge handbook of language and mind engineering* (pp. 274–292). Routledge.
- Pragglejaz Group. (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22 (1), 1–39.
- Semino, E., Demjén, Z., & Demmen, J. (2018). An integrated approach to metaphor and framing in

cognition, discourse, and practice, with an application to metaphors for cancer. *Applied Linguistics*, 39 (5), 625–645.